環境文化創造センター

自由学園のキャンパス・フィールド活用推進の展開

吉川慎平

環境文化創造センター（以下、E センター）は、自由学園（以下、学園）全学の環境に関わる教育・研究・社会活動をリードし、支援するセンターとして 2018 年度に発足した。2025 年度（2025 年 4 月～2026 年 3 月）に実施した活動について、主なトピックを報告する。

1.　2025 年度の体制並びに概要

2025 年度は発足 8 年目を迎え、メンバーはセンター長：吉川慎平（最高学部准教授）、次長：鈴木康平（学部長補佐・最高学部特任教授）、次長：小田幸子（最高学部准教授）、研究員：松島範子（食糧部部長）の他、オブザーバーとして渡邉武俊（初等部・アフタースクール主任）が加わり、5 名体制（いずれも兼務）で活動した。

2025 年度は、主軸としている学園が保有する教育的資産であるキャンパスやフィールド（農場・植林地等）とその周辺地域のさらなる利活用に向けた取り組みの推進を継続した。E センターメンバーが主体となり、または支援する形で、キャンパス・フィールドを活用した教育・研究・社会活動を生徒・学生とともに実践し、発信に努めた。以下に 2025 年度の主なトピックとその他トピックの進捗状況を記す。

2.　2025 年度の主なトピック

1)　ホームページ（ブログ）・Instagram での情報発信・E センターニュースの休刊

2025 年度は E センターのブログを 17 件更新（2024 年度 11 件）した。最高学部ホームページにも関連記事を掲載している。また最高学部に関わる部分を中心に最高学部 Instagram でも E センターの活動を積極的に発信した。これらの一部を再掲する形で発行している『E センターニュース』は 2025 年度は休刊した。

2)　エコプロ（2025）への継続出展

2025 年 12 月 10 日（水）～12 日（金）の 3 日間にわたり、東京ビッグサイトで開催された「エコプロ 2025」に自由学園として出展した。4 年連続 4 回目の出展となる。2024 年と同様に大学・教育研究機関コーナーにブースを構えたほか、最高学部の領域横断研究：フィールドサイエンスゼミの 4 年生 1 名も参加し、ブースでの説明を行った（図-1）。

今回は「キャンパスから地域・社会、そして世界につながる学び」をメインテーマに、開設 100 周年を迎えた南沢キャンパスの変遷と現在の姿を、写真パネルの他、今回のために制作した南沢キャンパスの簡易ジオラマで表現した。また幼児生活団からリビングアカデミー（LA）まで、各部のキャンパスをフィールドとした活動についてそれぞれ写真パネルで展示した。

会場全体の 3 日間の来場者は約 6 万人（主催者発表）で、今回は 200 人を超える来場者に直接説明することができた。その他、最高学部、LA の学生はじめ、教職員、保護者、卒業生の来場もあった。また今回初めて、ブースで使用したパネルやジオラマなどを、より多くの方に見ていただけるよう、2026 年 1 月 8 日から 2 月 1 日まで、しののめ茶寮 2 階ギャラリーでリバイバル展を開催した [1,2,3]。



図-1　エコプロ 2025 における自由学園ブースの様子

3)　自由学園南沢キャンパス開設 100 周年記念イベントの実施

1925 年に開設された南沢キャンパスは、2025 年に満 100 周年を迎えるにあたり、E センターで 3 つのイベントを企画し実行した。以下、イベント別に概要を記す。

① 南沢キャンパス 100 周年記念 3 部合同礼拝の挙行

2025 年 10 月 22 日（水）の中等部・高等部・最高学部の 3 部合同礼拝の時間（8 時 15 分から 8 時 40 分）を使い、「南沢キャンパス開設 100 周年記念合同礼拝」を 60 周年記念講堂で挙行した（**図-2**）。

プログラムは、1. 更科幸一学園長による礼拝とお話、2. ゲストスピーカーとして HITOTOWA INC. 代表で学園町在住の荒昌史先生（最高学部非常勤講師）の記念講演、3. 最高学部 4 年生の丸原歩さん、芳原爽さん（フィールドサイエンスゼミ所属）から②の 100 周年記念キャンパスカード（在校生向け記念品）の紹介、4. 環境文化創造センターの吉川から③の記念の企画展の紹介、という順で行った。

更科幸一学園長による礼拝とお話は、礼拝（讃美歌：333 番、聖書：創世記 1 章 1 節～2 章 3 節）にはじまり、「天地創造と自然との共生」をテーマに話された。続いて荒昌史先生の記念講演は、先生のプロフィールと学園町と関わるようになったきっかけ、学園町の歴史と特徴、未来に向けての課題について話された。短い時間ではあったが、100 周年の節目であることと、南沢キャンパスと学園町が一体であること、これからも地域と共にこの環境を守っていくことを確認する機会を持つことができた [4,5]。



図-2　100 周年記念 3 部合同礼拝での講演の様子

② 南沢キャンパス 100 周年記念キャンパスカードの配布

E センターでは自由学園のキャンパス・フィールドについての基本的情報をまとめた「自由学園キャンパスカード」を、2022 年 4 月から順次製作・配布を開始している。現地訪問時に 1 人 1 枚受け取ることができる、ミニ版パンフレットという位置付けで、現地に足を運ぶ楽しみと、現地の理解を醸成するツールとして活用している。

最高学部の領域横断研究：フィールドサイエンスゼミの一環で、2024 年度、新たに南沢キャンパスのカードを 2 種類（通常と記念バージョン）製作し（**図-3**）、今回記念品として在校生全員に配布する旨を、①の 100 周年記念 3 部合同礼拝で製作・配布に関わった学生からアナウンスした。

実際のカードは礼拝後にクラス単位で配布され、生活団、初等部、リビングアカデミー（LA）の在校生のほか、教職員全員にも別途配布した [4,5]。



図-3　配布した 100 周年記念キャンパスカードのイメージ

③ 南沢キャンパス 100 周年記念企画展の開催

南沢キャンパス 100 周年記念企画展「地図と空中写真にみる南沢キャンパス周辺の変化～明治から令和までの 150 年～」と題し、パネルを中心に、国土地理院所蔵の地形図・空中写真を使用し、明治から令和までの 150 年間に、南沢キャンパス・南沢学園町の周辺環境がどのように変化してきたのか、時空間的に可視化することを試みた。キャンパスを写した航空写真なども時代別に紹介した（**図-4**）。

会期は、生徒・学生・教職員向けに①の 100 周年記念 3 部合同礼拝当日の 2025 年 10 月 22 日から 24 日まで高等部講堂、10 月 25 日から 28 日まで最高学部食堂、10 月 29 日から 31 日まで中等部記念ホールでそれぞれダイジェスト版のパネルを巡回展示し、一般向けには 11 月 4 日から 30 日までしののめ茶寮 2 階ギャラリーで展示した。

会期中の 11 月 23 日は学校公開イベント「JIYU1123」が開催され多くの来場者があった。また最高学部の実習、講義時間を利用した団体来場もあった。会場に設置したアンケートからは、大変好評であったことがうかがえ、内容について冊子体での販売希望の声もいただいた。なおアンケート回答者には②の 100 周年記念キャンパスカードを持ち帰りいただけるようにした [4,5,6,7,8]。



図-4　南沢キャンパス 100 周年記念企画展の様子

4)　学内の歴史的な「モノ資料」の保存・活用

学内には過去の教育・研究・社会活動等を通じて産み出された様々な物品（実物）が残置されており、こうした物の中には、自由学園の歴史を物語る「モノ資料」として歴史的、資料的価値を有するものもあると考えられる。一方、現状としては文書や写真といった記録資料類を除き、物品を保存する仕組みはなく、価値が検討されないまま破棄、腐朽、散逸してきた物品も多いと考えられる。こうした点に鑑み、とりわけ自由学園のキャンパス・フィールドの歴史を示していく必要性から、モノ資料の保存・活用をEセンターで推進している。

2025 年度は継続案件として 2024 年度に実施した那須農場関係モノ資料について引き続き整理を進めた。2025 年 2 月に建屋が撤去され、元位置にてシート養生による屋外保管している 6 呎（フィート）旋盤（工作機械）の恒久的な保存・活用に向けて、中古屋根部材の現物寄付の受け入れ作業を行うとともに、資料的価値を確認するための徹底的な来歴調査を実施した（**図-5**）。

その成果については、戦後 80 年を受けて 2025 年 11 月 23 日の「JIYU1123」の企画の一つとして実施された「最高学部教員による講座リレー　戦後 80 年と自由学園」の中で、「校内に遺された工作機械から紐解く『戦争と平和』」と題し、吉川が取りまとめて発表した [9]。また 6 呎旋盤のメーカーに関する調査から、東京都葛飾区に所縁のある製品であることが判明し、2026 年 2 月 15 日に開催された「あらかわ学会年次大会　2025」での、「自由学園に遺された工作機械から紐解く葛飾の軍需工場・太田鐵工所の消長～水利に恵まれた葛飾区の工業都市化の変遷～」と題し、吉川が取りまとめて発表した [10]。詳細については、自由学園年報第 29 号（本号）収載の巻頭特集記事を参照されたい [11]。

また新規案件として新名栗フィールド（名栗すこやか村）の古民家内にて保管していた植林・育林活動関係の資機材について、活動の中断に伴って整理・処分することとなったため、これらについてもモノ資料として適切に保存するための選別作業と展示活用のための準備を実施した。展示活用では、当面残置としている名栗植林地の作業小屋内に、代表的な道具類を展示し（常設はしていない）、来場者が往時の作業や生活を追体験できるよう、「植林・育林活動資料館［名栗分館］」として、2025 年 4 月の最高学部 1 年生の飯能・名栗フィールド活動の際から活用を開始した（**図-6**）。また今後は那須農場内に設置する展示室（仮称）内にも、那須農場が植林・育林活動発祥の地であることや、黒羽植林地の根拠地であったことを記念して、植林・育林関係のモノ資料展示を整備する予定である。継続・新規ともに次年度以降も継続して取り組む予定である [12]。



図-5　建屋が解体され全貌が明らかになった 6 呎旋盤



図-6　作業小屋に簡易整備した植林・育林活動資料館

3.　2025 年度のその他トピックの進捗状況

1)　東久留米市（地域）関係

①　東久留米市環境フェスティバル

2025 年 6 月 7 日（土）、8 日（日）に開催された「第 29 回東久留米市環境フェスティバル」に、E センターと最高学部の生活経営研究実習：庭園・自然環境：草本・潅木グループが共同で参加し、例年通り校内を流れる立野川の源流域に相当する向山緑地を対象に調査を行った成果等について示した [13]。

②　身近な水環境の全国一斉調査への参加

2025 年 6 月 1 日（日）に全国水環境マップ実行委員会主催の「第 22 回身近な水環境の全国一斉河川調査」に参加した（**図-7**）。学園は調査が全国規模になった 2004 年の第 1 回以降、22 年連続の参加となる。学園は校内を流れる立野川を含め、東久留米市内の 16 地点を担当している。調査では COD（化学的酸素要求量）など複数の水質項目について測定し川の様子なども記録する。高等部の生徒 2 名、最高学部の学生 5 名と教員 2 名の計 9 名が参加した [14]。



図-7　南沢湧水での水質（透視度）測定の様子

③　川でつながる発表会への参加

2025 年 12 月 13 日（土）に例年最高学部の水文・気象観測室の学生が参加している「川でつながる発表会（第 21 回）」が武蔵村山市民会館で開催され、交流会でポスター展示のみを行った（**図-8**）。ポスターでは、都内有数の日量 4.3 万トンの湧水量を誇る環境省選定：平成の名水百選「落合川と南沢湧水群」について、校内を川が流れる学校として自由学園南沢キャンパスについて、流域の水循環の健全化に向けて活動する最高学部の水文・気象観測室と高等部の川管理グループの活動についてそれぞれ紹介した。



図-8　川でつながる発表会でのポスター展示の様子

2)　「木の学び」・「水の学び」と植林地活用

2025 年 4 月 27 日と 9 月 27 日に実施された、最高学部 1・2 年の「飯能・名栗フィールド活動」の支援を継続した。2.4)で示したように、名栗植林地に植林・育林活動で使用したモノ資料を展示し活用した。

植林地の活用に向けては、夏休み期間中に教職員向けの名栗植林地見学会を最高学部のフィールドサイエンスゼミで「木の学び」をテーマに取り組む学生と共同で初開催した。希望者を募ったところ複数の応募があり 2025 年 8 月 21 日と 28 日の二度実施することとした。参加者はスタッフを含め、21 日は 9 名（1 名は高等部の生徒）、28 日は 10 名の計 19 名が参加した。所属は多岐にわたり、最高学部、高等部、中等部、食糧部、学園長室、CM 室となった。参加者からは「名栗がどのような場所か知りたかったので参加できて良かった」、「もっと多くの教職員に参加してほしい」、「学園の自然に対する考え方や実際に植林を行ってきた実績を知ることのできるとてもよい機会でした」などの感想と共に、実際の利活用についてもいろいろなアイディアが出された [15]。



図-9　教職員向け名栗植林地見学会の様子

3)　自由学園水文・気象観測システムの運用

南沢キャンパスの高精度気象観測システム（フィールドプロ社との共同研究による）を中核とした自由学園水文・気象観測システムの運用については、最高学部の学生による水文・気象観測室の活動を支援し、維持管理を継続した。最高学部棟屋上露場については、2019 年度に導入し 2025 年度で 6 年目となった。

① 明日館（目白）の気象観測露場整備

自由学園のキャンパス・フィールドを中心とした観測網の整備については、懸案となっていた明日館（目白）への設置を関係者の了解のもとで推進した。2025 年 9 月 25 日に最高学部の水文・気象観測室の学生も参加して基礎工事を含む架台整備、12 月 24 日に観測機器（一部はフィールドプロ社提供）の取り付けを行い、2026 年 1 月 1 日から運用を開始した。2026 年 3 月 19 日に雨量計について気象庁検定付き機器に入れ替え、正式運用を開始した（**図−10**）。当座の観測項目は、気温、湿度、雨量の 3 要素である。都心の池袋に行政の観測地点はなく、地元豊島区をはじめ都市の防災・減災等への活用が期待される。またこれにより黒羽植林地を除いた全てのキャンパス・フィールドでの一応のモニタリング体制を構築することができた。なお日常の管理は明日館に依頼することとした。

② 気象データの利活用

一連の観測データについては『自由学園年報』[16]並びに最高学部の紀要『生活大学研究』[17]への気象統計情報の掲載を継続した。また東久留米市との包括連携協定の一環で、市発行の『かんきょう東久留米』[18]への気象統計情報の提供依頼にも継続して対応した。また他大学からのデータ提供依頼もあった。その他学内での活用は 3.5)②・③で示す。



図−10　運用を開始した明日館（目白）露場

4)　自由学園キャンパスカードの発行

2.3)②でも示したが、自由学園のキャンパス・フィールドについての基本的情報をまとめた「自由学園キャンパスカード」について、2022 年 4 月から順次製作・配布を開始した。現地訪問時に 1 人 1 枚受け取ることができる、「ダムカード」を模したミニ版パンフレット（88mm×63mm）という位置付けで、現地に足を運ぶ楽しみと、現地の理解を醸成するツールとして活用している。

2025 年度は最高学部の領域横断研究:フィールドサイエンスゼミの研究の一環で検討を行ってきた明日館（目白）のキャンパスカードを、2025 年 7 月 10 日の中等部 1 年生の「TLP」の授業（「キリストを知る」と「自由学園を知る」の 2 領域で構成されているカリキュラム）で明日館見学を行うのに合わせて発行し、初めて配布を行った（**図−11**）。また 9 月 25 日には高等部 1 年生も同様の授業で明日館見学を行い、同様に配布した。どちらも制作・配布を担当した最高学部のフィールドサイエンスゼミの 4 年生 2 名が明日館に出向き、生徒に向けて最高学部のゼミの紹介とカードの趣旨について説明し、最後に在学中に自由学園のキャンパス・フィールドとその周辺地域にも関心を持ち、様々な機会を捉えて訪問してほしいというメッセージを伝えた。カードを受け取った生徒からは歓声も上がり、明日館見学のお土産になったと喜んでもらうことができた。今後、訪問する在校生にも明日館から継続して配布する予定である。また 12 月 24 日に全校の教職員を対象とした研修会が明日館で開催された際も、同様に配布した[19,20]。

また南沢キャンパスのキャンパスカードについては、2.3)③に示した通り、南沢キャンパス開設 100 周年記念イベントに合わせ在校生、教職員全員に配布した。



図−11　制作した明日館のキャンパスカードと担当した学生

5)　講師等の派遣・その他

① 中等部・水防災に関する講義（座学と見学）

2025 年 7 月 7 日と 2026 年 3 月 2 日に中等部からの依頼を受け、吉川が中等部 3 年の技術・家庭科の授業の中で、「身近な南沢キャンパスから水防災について考えよう」と題した座学と、校内の雨水排水対策、非常用発電機と井戸、立野川暗渠周辺の見学（2 コマ連続）を実施した。次年度からは 2 年生を対象に実施する予定。

② 中・高等部 2 学期始業式での気象防災に関する講演

夏休み期間中の 2025 年 8 月 18 日、南沢キャンパス付近で発達した積乱雲からのダウンバースト現象とみられる突風が発生し、大芝生北東に位置するシダレヤナギの大木が折れるなどの被害があった。被害の発生状況と観測された気象データとの対応について教職員に情報共有したところ、中・高等部からの依頼を受け、9 月 1 日の中等部・高等部の 2 学期始業式で生徒に向けて解説することとなった。吉川が「気象災害からいのちとくらしを守るために」と題し、気象現象に由来する気象災害の種類、今回のシダレヤナギの倒木とその際の気象状況、最高学部生による水文・気象観測室の活動、いのちとくらしを守るための情報収集と避難行動などについて解説した（図−12）[21,22]。



図−12　中・高等部 2 学期始業式での講演の様子

③ 最高学部 2 学期始業式での気象防災に関する講演

②の中・高等部 2 学期始業式での解説を受け、同内容を 9 月 16 日の最高学部の 2 学期始業式でも学生に向けて解説することとなった。9 月 11 日に南沢キャンパス付近で発生した局地的大雨で、1 時間に 84mm の非常に激しい雨を記録したことについても解説を加えた。

このような機会を通じて、生徒・学生、教職員に気象災害への警戒を強めてもらえればと願う[21,22]。

6)　学会・シンポジウム等での発表

E センターのメンバーが土木学会、日本緑化工学会、日本水環境学会等で複数の発表を行った。E センター関係の発表は次の通り。

① 土木史研究発表会　2025 年 6 月 21 日〜22 日

2025 年 6 月 21 日から 22 日に東京科学大学（旧東京工業大学）大岡山キャンパスで開催された土木学会の第 45 回土木史研究発表会で、吉川が「熊野街道 紀伊長島・尾鷲間における煉瓦隧道群の建設経緯と残存状況」と題して 25 分間口頭発表した。また講演論文が『土木史研究 Vol.45』に掲載された[23]。本研究は海山植林地が位置する三重県紀北町周辺に残された明治〜大正期に建設されたトンネル遺構群の現地調査（図−13）に基づくもので、地域の発展と道路整備が大きく貢献したことを土木史の観点から取りまとめた。

また同研究について、2025 年 9 月 1 日の朝日新聞・愛知・岐阜・三重の各県版に、吉川のインタビュー記事が掲載された[24,25,26,27]。



図−13　紀北町（旧海山町）でのトンネル遺構の現地調査

② 日本緑化工学会　2025 年 9 月 8 日〜9 日

2025 年 9 月 8 日から 9 日に京都大学芝蘭会館で開催された日本緑化工学会 第 56 回大会・研究発表会で、小田、吉川が 2 件のポスター発表を行った。小田らは「自治体発信のナガミヒナゲシ(*Papaver dubium*)に関する注意喚起情報の追跡調査結果とキーワード検索需要の傾向分析」と題し、環境省の特定外来生物等には指定されていないものの、近年全国に拡大し生態系や人体への影響が懸念されているナガミヒナゲシ（南沢キャンパスでも確認）について、

全国の自治体が独自に発信する注意喚起情報の分析から捉えられた傾向について取りまとめた。吉川らは「茨城県つくば市全域を対象としたナガミヒナゲシ(*Papaver dubium*)の目視調査による空間的可視化と出現状況の傾向」と題し、注意喚起情報を発信する自治体の一つである茨城県つくば市に注目し、市内全域での生育状況を目視調査し、空間的可視化を試みるとともに、今後の緑地管理に資する目的で、出現状況の傾向についての考察を取りまとめた[28]。

③ 土木学会全国大会　2025 年 9 月 10 日～12 日

2025 年 9 月 10 日から 12 日にかけて熊本大学、熊本城ホールで開催された土木学会全国大会第 80 回年次学術講演会で、吉川が「国内在住の海外渡航者の視点からみた世界の水道インフラの状況」と題してポスター発表を行った。諸外国の水道水の飲用適否について、海外旅行ガイドブックである『地球の歩き方』掲載の情報に注目し、シリーズ 184 件を網羅的に収集・分析した結果について示した。日本以外に水道水を直接飲料可能な国は 18 カ国程度あることが明らかになるなど、世界的な水道インフラの状況の一端が捉えられた[29]。

なお本発表は優秀講演賞を受賞することができた。

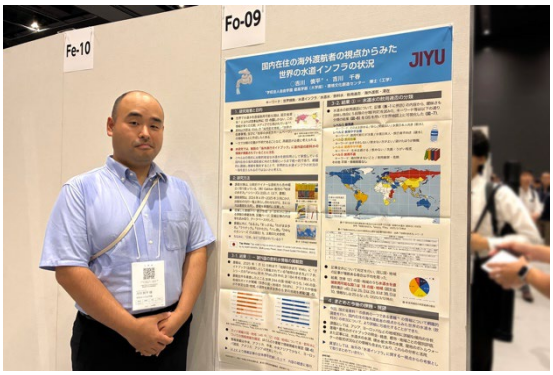


図-14　土木学会でのポスター発表の様子

④ 水都大垣水循環フォーラム 2025　2025 年 12 月 2 日

2025 年 12 月 2 日に開催された岐阜県大垣市主催の水都大垣水循環フォーラム 2025 で、吉川が東久留米市の平成の名水百選「落合川と南沢湧水群」と、川が流れる学校「自由学園南沢キャンパス」について、ポスター展示を行った。また湧水保全を行う多くの地域との交流を図ることができた[30]。

⑤ あらかわ学会年次大会 2025　2026 年 2 月 15 日

2026 年 2 月 15 日に NPO 法人あらかわ学会主催の「あらかわ学会年次大会 2025」が、足立区・綾瀬の勤労福祉会館を会場に開催され、吉川が「自由学園に遺された工作機械から紐解く葛飾の軍需工場・太田鐵工所の消長～水利に恵まれた葛飾区の工業都市化の変遷～」と題し、2.4)でも示したが、保存・活用を進めている自由学園那須農場内に遺された南沢の「実験機械工場」で戦中に使用された「6 呎旋盤」の来歴と、製造元の調査から浮上した葛飾区の軍需工場・太田鐵工所の消長、背景としての葛飾区の工業化の変遷について取りまとめた。今回は、2025 年 11 月 23 日のキャンパス公開イベント「JIYU1123」当日に開催された、最高学部の教員による講座リレーの際、「校内に遺された工作機械から紐解く『戦争と平和』」と題して発表した内容に、その後の調査の進展を加えたものである。また講演用論文が講演論文集に掲載された[31]。

⑥ 霞ヶ浦流域研究 2026　2026 年 3 月 7 日

3 月 7 日(土)に茨城県鹿行生涯学習センター(レイクエコー)を会場に開催された茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション主催の「公開シンポジウム霞ヶ浦流域研究 2026」で、小田と吉川がポスター発表を行った。小田らは「茨城県内のデータ補完を目的とした久慈川水系の河川水電気伝導率調査」と題し、自由学園黒羽植林地が位置する八溝山地を源とする久慈川水系を対象とした調査結果について、既往報告との比較も含めて取りまとめた。吉川は「茨城県つくば市全域を対象としたナガミヒナゲシの目視調査による空間的可視化と出現状況の傾向」と題し、茨城県つくば市(霞ヶ浦流域)に注目し、市内全域での生育状況を目視調査と空間的可視化を試みるとともに、出現状況の傾向について取りまとめた[32]。

⑦ 日本水環境学会年会　2026 年 3 月 9 日～11 日

2026 年 3 月 9 日から 11 日にかけて中央大学多摩キャンパスで開催された第 60 回日本水環境学会年会で、吉川らが「中学校技術・家庭科(技術分野)における校内既存ストックを活用したアクアポニックスの実践」と題し、2024 年度から吉川が担当している中等部 3 年の技術科実習水産グループで、2 年に渡り取り組んでいる「アクアポニックス」について紹介した。アクアポニックスは、従来からの水産養殖と水耕栽培を組み合わせた次世代の農業システムで、水を媒介とし、魚の糞などから発生した汚れを微生物によって分解し、植物に栄養として吸収させるというものである。中学の学習指導要領(技術家庭科)においては、魚の飼育と植物の栽培を行うことが求められており、これを同時に達成

可能である点、更には環境負荷の低減が可能である点など、教材としての有効性を示しつつ、実際にアクアポニックスを運用する場合、様々な諸条件をクリアする必要がある点などについて具体的に示した[33]。

参考文献

1) 自由学園環境文化創造センター：12 月 10・11・12 日開催「エコプロ 2025」に出展しています，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/90124，2025/12/10.
2) 自由学園出版局：「エコプロ」に出展 学園の取り組みを発信・交流，学園新聞 No.755 (6)，2026/2/27.
3) 自由学園環境文化創造センター：エコプロ 2025 自由学園ブースのリバイバル展をしののめ茶寮で開催中です，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/90274，2026/1/8.
4) 自由学園出版局：南沢キャンパス開設 100 周年 学園町の歴史・文化再確認，学園新聞 No.754 (5)，2025/12/22.
5) 自由学園環境文化創造センター：10 月 22 日 南沢キャンパス開設 100 周年記念合同礼拝を挙行しました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89937，2025/11/8.
6) 自由学園環境文化創造センター：自由学園南沢キャンパス開設 100 周年記念企画展をしののめ茶寮で開催します，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89891，2025/10/23.
7) 自由学園環境文化創造センター：自由学園南沢キャンパス開設 100 周年記念企画展がしののめ茶寮で開催中です，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89992，2025/11/14.
8) 自由学園環境文化創造センター：最高学部の講義・実習で南沢キャンパス開設一〇〇周年記念企画展を見学，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/72862，2025/11/14.
9) 自由学園最高学部：11 月 23 日の「JIYU1123」当日に最高学部の教員による講座リレーを開催します，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/info/72909，2025/11/17.
10) 自由学園環境文化創造センター：「あらかわ学会年次大会 2025」で教員が口頭発表しました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/90374，2025/2/15.
11) 吉川慎平：JIYU1123 最高学部教員による講座リレー 校内に遺された工作機械から紐解く『戦争と平和』，自由学園年報第 29 号，2026.
12) 自由学園最高学部：1 年生対象の春の「飯能・名栗フィールド活動」が行われる，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/71966，2025/5/3.
13) 自由学園環境文化創造センター：第 29 回東久留米市環境フェスティバル出展のご案内，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/info/72023，2025/6/3.
14) 自由学園環境文化創造センター：高等部生・最高学部生が第 22 回身近な水環境の全国一斉調査に参加，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89068，2025/6/25.
15) 自由学園環境文化創造センター：全学的な活用を目指して教職員向け「自由学園名栗植林地見学会」を開催，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89703，2025/9/16.
16) 自由学園環境文化創造センター：2025 年気象観測報告，自由学園年報第 29 号，2026.
17) 自由学園環境文化創造センター：2025（令和 7）年自由学園南沢キャンパス水文・気象観測年報（No. 6），生活大学研究 Vol. 12 （1），予定.
18) 東久留米市：令和 7 年度版かんきょう東久留米，予定.
19) 自由学園最高学部：中等部 1 年生の明日館見学に際しゼミで制作した「キャンパスカード」を配布，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/72145，2025/7/10.
20) 自由学園最高学部：高等部 1 年生の明日館見学に際しゼミで制作した「キャンパスカード」を配布，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/72702，2025/10/6.
21) 自由学園環境文化創造センター：南沢キャンパス付近でダウンバースト発生か、局地的な気象現象を観測，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/72250，2025/8/19.
22) 自由学園環境文化創造センター：中高始業式・最高学部始業式で夏休み中の気象現象について解説，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89733，2025/9/19.
23) 自由学園環境文化創造センター：土木史研究発表会で口頭発表をしました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89254，2025/6/26.
24) 自由学園環境文化創造センター：熊野街道の土木遺産について本学教授のインタビューが『朝日新聞』に掲載されました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89753，2025/9/21.
25) 朝日新聞社：隧道開通 険しい地形に苦労 明治期に計画 最新技術使い最短距離で，朝日新聞三重版，2025/9/1.
26) 朝日新聞社：東紀州 隧道群の歴史知る 明治期計画 複雑地形での建設に先人の苦労，朝日新聞岐阜版，2025/9/1.
27) 朝日新聞社：旧熊野街道の隧道群ひもとく 複雑地形、建設に苦労 土木史の視点で調査，朝日新聞愛知版，2025/9/1.
28) 自由学園環境文化創造センター：環境文化創造センターの研究成果を日本緑化工学会で発表しました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/89789，2025/9/28.
29) 自由学園最高学部：学部教員が土木学会全国大会でポスター発表しました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/72626，2025/9/28.
30) 自由学園環境文化創造センター：水都大垣水循環フォーラム 2025 でポスター展示を行いました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/91189，2025/12/3.
31) 自由学園環境文化創造センター：「あらかわ学会年次大会 2025」で教員が口頭発表しました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/90374，2026/2/15.
32) 自由学園環境文化創造センター：環境文化創造センターの研究成果を「公開シンポジウム霞ヶ浦流域研究 2026」でポスター発表しました，自由学園 Web，https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/90467，2026/3/11.

33) 自由学園環境文化創造センター：日本水環境学会年会でポスター発表しました，自由学園 Web，
https://www.jiyu.ac.jp/blog/envir/90507，2026/3/13.